

# 英文の読み方を考える V

## —意味上の主語について—

平井 正朗

### I はじめに

意味上の主語(以下、S')という用語は、高校英語教育現場において頻繁に耳にする言説であるが、構造が複雑なセンテンスでは統語関係の解析エラーが誤訳を生み出す要因になっている。本稿では、高校生が誤読しやすいS'を含む文を抽出し、ケアレスミスメカニズムを考察することによって、“直読直解”に資するアプローチを試みる。

### II 事例研究

#### II-1 第5文型 SVOC における意味上の主語

第5文型 SVOC のコアは、OC に主部(S') + 述部(P') の関係が内在することである。換言すれば、SV にはさらに別の二次的な SP' 関係(secondary predication) が後続しているということになる。従って、O は OC 内部構造における S' という見方が可能になる。読解過程において、OC に内在する SP' 関係は、V の支配領域に再度「文」が置換して組み込まれたという前提で談話情報を解釈すればよい。

(01) Most of us, at one time or another, are tempted to consider possible *alternatives to decisions we have made in the past or to the paths we have chosen to follow.*

(私たちの大部分は、時として、過去において自分がした決定や選んだ道をもしそうななかったらどうなっただろうかと考えてみたくなる) (同志社大, 07)

直訳は「過去にした決定や自分が選んだ道に取って代わるものの可能性を考える」であり、consider の O となる alternatives... が重名詞句転移による右方移動で consider + C + O という構造になっている。他動詞である consider の後に形容詞 possible があり、本来、後続すべき O となる N が欠落していることから SP' 関係の倒置を予測、第5文型を想定したい。SVOC 文型で C が形容詞の場合、文構造

が複雑になると形容詞を O となる N にかけた誤訳が見られる。

(02) We usually think of *the meaning of a poem — or any other literary work — as having been created and fixed by the writer*; all we readers have to do is find out what the author intended to say.

(東京大, 07)

(通例、我々は、詩 — あるいは他のあらゆる文学作品 — の意味を作者によって創造され、決められたもの、つまり、我々読者は著者が言おうとしていることを見つけ出すだけでいいのだと考えるものだ)

前置詞句は副詞句として機能する機会が多いため( )でくくり、SV 構造を浮かび上がらせる読み方をする傾向が強いが、O や C として機能することもある。(02) の場合、think of A as B から生起されたものになっており、意味上、A is B (<the meaning of a poem...has been created and fixed by...) の SP' 関係が成立するため SVOC と解析するほうが合理的である。前置詞句を前の N にかけて読むという誤訳が見られる。なお、C が as ... の場合、V には主観的判断を示す語が用いられ、組み込まれる文の A is B の真理値が客観的な言説でないことが特徴である。

(03) To be correct in one's use of language — and that means following the rules of grammar — makes *it* as certain as it ever can be *that one's reader will get the intended message.* (神戸大, 03)  
(人が言葉を正しく使うことは — それは文法規則に従うことを意味するものであるが — 読み手が意図されたメッセージを受け取

ることを、可能な限り確実なものにすることである)

O が形式目的語の it である場合、O の位置にくる不定詞句、動名詞句などの名詞句は右方移動し、C となる語句と S'P 関係を生起する。(03) では、makes に後続する it は形式目的語として機能し、that 節を指示、as certain as...can be の S' となっている。

## II-2 不定詞の意味上の主語

不定詞の S' が表層構造に明示される典型的な言語現象として、for + S' + to do + X がある。これは文が変形して SV が形態上の特性を失い、for + S' + to do + X に置換、母型文に組み込まれたと考えることができ、名詞句、形容詞句、副詞句として機能する。読解においても for + S' + to do + X は SVX からの変形であるから「S' のために～する」という読み方は誤りであり、「S' が～する(こと、ための、ために、して)」と訳出する。

(04) In theory an animal could pick up and go, defying all the social conventions and boundaries proper to its species. But such an event is less likely to happen than for *a member of our own species*, say a shopkeeper with all the usual ties — to family, to friends, to society — to drop everything and walk away from his life with only the spare change in his pockets and the clothes on his frame.

(大阪外大(現大阪大), 04)

(理論上、動物はその種に固有の社会的しきたりや境界線のすべてを無視して、生息地を変えることもできる。しかし、そのようなこと、例えば、家族や友人、社会とふつうの関係を持つ店主がすべてを投げ出し、わずかな金だけを持って、着の身着のままの状態ですれまでの生活から逃げ出すようなことは動物には起こりそうもない)

(04) では、「住処の変更」に焦点をあて、「動物」と「人間」を対比しているが、than 以下では不定詞句 for a member of...to drop... が名詞的用法として機能している。

(05) In other words, what is philosophy for? There is far too much philosophy, composed under far too wide a range of conditions, for *there* to be a general answer to that question. (京都大, 03)  
(言い換えれば、哲学は何のためにあるのか。哲学はあまりにも大きすぎて、さらにあまりにも広範な条件のもとに形成されているので、その問いに対して一般的な解答は存在しないのである)

(05) では for に後続する there が形式主語であり、a general answer が S' として機能している。there is a general answer to... という存在構文の組み込みを意識したい。

(06) Time is our tyrant. We are constantly aware of the moving minute hand, even of the moving second hand. We have to be. There are *trains* to be caught, *tasks* to be done in specified periods of time, *records* to be broken by fractions of a second, machines that set the pace and have to be kept up with. (立命館大, 04)  
(時間は私たちを支配するものである。私たちは常に分針の動きや秒針の動きでさえ意識する。そうしなければならないのだ。乗らなければならない列車があり、特定の期間でしなければならない仕事、1秒の何分の1かで破らなければならない記録やペースを設定し、それについてくることを要求するような機械が存在する)

不定詞の形容詞的用法は N + to do + X の名詞句から成り、N と不定詞句の関連性を①SV 関係、②VO 関係、③同格関係に分類できるが、SV 関係の場合、名詞句内部構造で N が S' の機能をす。 (06) では、N に相当する trains (< trains are caught), tasks (< tasks are done...), records (< records are broken...) と不定詞句が SV 関係になっており、N が S' として機能している。なお、SV 関係、同格関係の場合、不定詞句内部構造は「完全な文」になっているのが識別の指標である。

### II-3 動名詞の意味上の主語

動名詞の S' が表層構造に明示される典型的なものとして、N(s) + doing + X がある。これは文が変形して SV が形態上の特性を失い、所有格 (or 目的格) + doing + X に置換された名詞句と考えることができ、母型文に組み込まれ、S, O, C, もしくは前置詞の O として機能する。読解においても N(s) + doing + X は SVX からの変形であるから「X している N」という読み方は誤りであり、「N が X すること」と訳出する。

(07) Bears are relatively solitary for most of their adult lives, except when finding partners in spring and summer. When they gather in riverside areas to feed on salmon, they become aggressive. These confrontations can be either relatively harmless, resulting in *one bear* stealing a fish from another, or violent, ending in serious injury or death to a bear. (九州大, 07)

(クマが大人になってからの生活の大部分は、春や夏に相手を見つかる時以外は、比較的単独行動である。サケを食べるために川辺に集まるときは攻撃的になる。こういった格闘は比較的危険はなく、1頭のクマが他のクマから魚を取るか、もしくは激しいもので、一方のクマが重症を負うか、死に至ることもある)

副詞句として機能する分詞構文 *resulting in...* の前置詞 *in* に支配される名詞句内部構造で *one bear* が動名詞 *stealing* の S' となっている。A result in B が意味領域において<因果関係>を生起するため、前方照応語句である指示代名詞 *These*、つまり「サケを獲る際の攻撃的な行動」が<原因>、*in* に支配される動名詞句内部構造の S'P' 関係である「エサの奪い合いとその結末」が<結果>という結束性を構築している。誤訳例として *one bear steals* の組み込みが読み取れず、*stealing* を *one bear* にかけて訳す事例が見られる。

(08) More recently, in November 2005, the city of Kolkata started its own effort to evict squatters. Judges ordered the eviction of 20,000 families from a well-established

squatter village alongside one of the city's commuter rail lines. The squatters are resisting by demonstrating and interrupting traffic on major roads. Such harsh measures are based on *the governments'* misunderstanding of squatters and their communities. (明治大, 07)

(もっと最近の2005年11月、コルカタという都市が無断居住者を追い出す独自の取り組みを開始した。判事は、町のある通勤沿線に定着した無断居住者の村から2万家族の立ち退きを命じた。無断居住者は、デモをし、主要道路の交通を妨害して抵抗している。このような無情な措置は、政府が無断居住者や彼らの共同体を誤解しているということに基づくものである)

前置詞 *on* の O として支配される名詞句が行為名詞化形 (action nominal)、換言すれば、名詞的動名詞 (nominal gerund) として機能している。名詞的動名詞は、限定詞を伴う、所有格を伴う、意味上の目的語として *of* phrase を伴うなどの特性があり、接尾辞を伴う派生名詞形から生起される名詞句と同質性が高く、<動的イメージ>の動詞的動名詞に対して、<静的イメージ>が強い。読解では名詞句内部構造が *the governments misunderstand ...* から置換されたという前提で読み進めればよいが、ここでは「政府の無断居住者への誤解」がすでに「定着」したものであるというニュアンスを味読したい。

### II-4 分詞の意味上の主語

分詞の限定用法には、doing [done] + N となる前置修飾と N + doing [done] となる後置修飾がある。ともに分詞と N の sense group が名詞句を派生し、母型文で S, O, C, 前置詞の O となる。読解では、「...している、...される [た] N」と訳出するが、名詞句内部構造において N が S' として機能するため、N is doing [done] という S'P' 関係が内在した深層構造があることを意識したい。なお、後置修飾の場合、N の後に主格関係代名詞 + be 動詞が任意削除されたものとして処理する解釈もある。

(09) The testimony of those who saw him regularly is overflowing with evidence confirming Lincoln's exertions. As is

often pointed out, the physical toll that these effects exacted is visible in *the photographs* taken over the course of his four years in office. (京都大, 08)

(リンカーンにいつも会った人の証言は、彼の仕事ぶりを裏づけるような証拠に満ちている。よく指摘されるように、これらの努力が肉体的にどれくらい犠牲を強いたかは、在任中の4年間に撮られた写真を見ればわかる)

(09) では、関係代名詞節 *that these effects exacted* に修飾される先行詞 *the physical toll* が S, *is* が V, *visible* が C, *in* に支配される名詞句が前置詞の O となっている。前置詞 *in* の支配領域で過去分詞 *taken* に後置修飾される *the photographs* との内部構造において *the photographs were taken...* という S'P' 関係を生起している。

- (10) Today's Japanese writers have devised new ways of dealing with life. Surrounded by images in the media, they tend to present the world as it is seen, rather than as it is felt: *the latter* being characteristic of the novels Western readers used to recognize as peculiarly Japanese. (早稲田大, 07)
- (今日の日本の作家は、人生を扱う新しい方法を編み出してきたのである。メディアの画像に囲まれて、彼らは感じられるままではなく、むしろ見えるままに世界を表出する傾向がある。前者は、これまで西洋の読者が通常、日本特有のものと思ってきた小説の特徴である)

分詞構文の S' が表層構造に明示される典型的なものとして、N[主格]+doing+X(独立分詞構文)がある。これは文が変形して SV が形態上の特性を失い、副詞句 N[主格]+doing+X に置換、母型文に組み込まれたと考えることができる。この表現形には接続詞がなく、2文の結束性が明示されていないので、context からその関係を類推して訳出することになる。(10) の *the latter* 「後者」は分詞構文 *being* の S' になっているが、context では B rather than A から「前者」と訳出することができる。

- (11) Russian also suffers from an image problem there, with *Czechs, Poles and residents of other former Warsaw Pact member states* resentful at having been forced to study a language linked with an occupying foreign power. (東京外大, 08)
- (さらにチェコ人、ポーランド人、そしてその他の旧ワルシャワ機構の加盟国の住人たちが、外国の占領勢力に結びついた言葉を習わされたことに腹を立てているため、ロシア語はイメージの問題でも不利な立場に立たされている)

(11) では *with* の支配領域に *Czechs, ... resentful ...* という S'P' 関係 (< *Czechs, ... are resentful...*) が内在している。読解では、S' の sense group をスキミングできず、P' となる形容詞 *resentful...* を前の N にかけて読むという誤訳が見られる。

## II-5 名詞構文の意味上の主語

名詞構文とは、文が変形して SV が形態上の特性を失い、名詞句となり、母型文に組み込まれたものであり、S, O, C, もしくは前置詞の O として機能する表現形のことである。S' は表層構造に明示されるが、属格名詞と後続する主要部名詞の意味領域は、所有、主語、目的語など多様な文法関係を生起するので、名詞句内部の S'P' 関係をおさえた訳出を心がけたい。

- (12) What he was not, however, was a perfect genius. In fact, when it came to the biggest scientific issue of all — the origin of the universe — he was utterly wrong. And while we should certainly appreciate his achievements, we may learn a more valuable lesson by investigating *Einstein's* greatest failure. (神戸大, 07)
- (しかし、彼は完璧な天才ではなかった。実際、すべての中で最も大きな科学の問題である、宇宙の起源ということになると、彼は完全に間違っていた。そして、我々は確かに彼の業績を認める一方で、アインシュタインが最も大きな失敗をしたということを研究することによってより価値のある教訓を学べるかもしれないのである)

(12) では、前置詞 *by* に支配される動名詞 *investigating* の O' となる名詞句内部で S' が形態素 *-s* が付加された所有格 *Einstein's* に変形し、自動詞 *fail* が名詞化したものになっている。「アインシュタインの最も大きな失敗」という直訳でもよいが、 $S + Vi \rightarrow N's[\leftarrow S] + N[\leftarrow Vi]$  (< *Einstein failed most greatly.*) への名詞化を意識して、「アインシュタインが最も大きな失敗をすること」と意訳できる読解力を涵養したい。

(13) *The friend may well have felt obliged to call and express his sympathy to the woman whose sister had died, but his lack of a full emotional connection made the call a hollow gesture.* (一橋大, 08)  
(その友人はたぶん、姉を亡くした女性に電話をして追悼の意を表さなければならぬと感じたのだろうが、彼は感情的なつながりを十分には持たなかったで、その電話がうわべだけのそぶりになってしまった)

$S + Vt + O$  から  $N's[\leftarrow S] + N[\leftarrow Vt] + of + N[\leftarrow O]$  に名詞化された言語現象であり、誤訳だけでなく整序英作などでもミスが生じやすい。 *he lacked a full emotional connection* の V に焦点をあて、 $N's[\leftarrow he] + N[\leftarrow lacked] + of + N[\leftarrow a\ full\ emotional\ connection]$  に名詞化されたものが *but* 以下に組み込まれ、文の S になっている。 *of phrase* の派生に伴い、動詞 *lack* の名詞形である *lack* に変形している点にも注意したい。

(14) *Some experts say our education system, with its strong emphasis on testing and rigid separation of students into different levels of ability, also bears blame for the disappearance of drive in some kids.*

(信州大, 07)

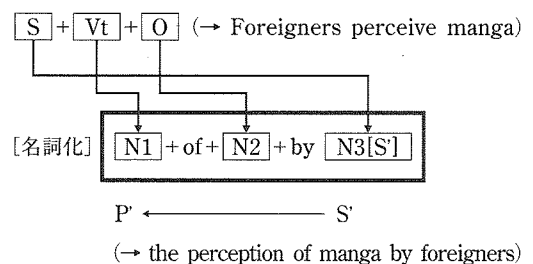
(テストをすることを非常に重要視し、能力別に生徒を厳しく分ける我々の教育制度もまた、一部の子供たちの意欲を失う原因となっていることへの責任を負うと述べる専門家もいる)

大学入試における長文素材では S' や O' として機能する *of phrase* は頻繁に登場する。(14)において *rigid*

*separation of students into...* の *of* は目的格として機能し、「生徒を…に厳しく分ける」という VO 関係、*the disappearance of drive in some kids* の *of* は主格として機能し、「子供たちの意欲がなくなる」という SV 関係をおさえた訳出を心がけたい。

(15) *As difficult as it may be for non-Japanese to accept, I think the perception of manga by foreigners usually tells us more about the prejudices of those foreigners than it does about those of the Japanese people who create and enjoy manga.* (愛知教育大, 06)  
(日本人以外には受け入れにくいことだろうが、外国人がマンガをどのように受け止めているかは、マンガを創り出し楽しんでいる日本人の偏見についてよりも、むしろこういった外国人の偏見についてたいていは多くを語っているのだと思う)

$S + Vt + O$  (< *Foreigners perceive manga*) の V に焦点をあて、 $N[\leftarrow the\ perception] + of + N[\leftarrow manga] + by + N[\leftarrow foreigners]$  に変形された受動名詞化形である「外国人がマンガをどのように受け止めているか」と SP' 関係を把握する読み方が不可欠である。 *by* = 「～によって」のイメージが強すぎて「外国人がマンガをどのように受け止めているか」という文の S に内在する SP' 関係を読み落とさないようにしたい。



なお、*As difficult as...* は、<譲歩>を表す副詞節として機能しており、その内部で *it* は他動詞 *accept* の意味上の O' となる *tough* 構文となっている。

(京都文教中・高等学校教諭)